

【報告事項1】 2015（平成27）年度事業報告の件

1) 2015年度国際会議開催

2015年12月9日から11日の3日間、一般社団法人映像情報メディア学会（ITE）とThe Society for Information Display（SID）の主催で、大津プリンスホテルにて第22回ディスプレイ国際ワークショップ（IDW '15）を開催した。ノーベル賞受賞者天野先生の招待講演やオーラルセッションとオーバーラップしないデモセッション、ポスターセッションの設定、AR&VR関連学会との連携強化などの施策により、発表論文数461件（昨年480件）と19件減少したにも関わらず、参加者数は1,273（昨年1,188名）と昨年より85名増加した。開催費用は、64,928,897円で黒字化を達成した。

2) 中長期的検討

2014年度に設置した国際会議委員会において、中長期的なIDWの運営の議論を実施し、次の見解をまとめた。

i) 長期的見解

- ・ 開催規模について意識的にコンパクト化の方向へ舵を切る意図は今のところ持たず、新分野の取り込み等により現状の開催規模の維持ないし拡大を目指す。
- ・ IDWは春のSID Symp.とセットで年に2回のディスプレイ分野の国際会議として、しかも日本を含むアジア圏から出席しやすい方の国際会議との位置づけとして位置づける。
- ・ IDWを維持するためには、積極的に分野を広げる方針で行く。ディスプレイ技術に連なる技術であれば、ディスプレイ本体技術でなくても積極的に取り込む。
- ・ スコープの現状（現在15 scopeでWS数14と大差なし）は実は経過措置で、WS数よりも少ないスコープ数に変えて行く意図が元々あり、今後変更の余地がある。
- ・ 現状Reject率（5%以下）をSID Symp.並（20%程度）に上げるような数値目標を掲げることせず、精緻なaccept審査や予稿の質の向上施策により会議の質の向上を目指す。

ii) 中期的見解（IDW/AD '16 コア委員会での具体的検討を提案）

- ・ 論文と会議の質を上げる努力を行う。（具体策の例：Accept審査時に予稿の質を上げるためのアドバイスを積極的に付記する。質疑の口火を切る役目を座長のみならず担当WSプログラム委員のDutyとして再周知する。）
- ・ 予稿の分量や質に問題のあるものが混在している現状に対し、予稿ページ数は3-4pageとし、予稿の分量や完成度に問題がある場合は書き直しをお願いすることがあることをCall For Paperに明記する。
- ・ 予稿の審査基準を明確に成文化する。審査基準をWSにも配る。
- ・ コアプロ委員はCamera Readyを全て見られるようにする。
- ・ 問題のある予稿にはコアプロ審査の段階で「要注意」コメントをいれるようにする。
- ・ IDWの活性化のため、新しい分野を積極的に取り込んでいく一手段として、ここ数年設定のなかったTopical Sessionを設けて新しい分野の発表人材、運営人材を取り込む。
- ・ 快適な作業環境等を目指すヒューマンインタフェースデザインのあり方を認知科学的なアプローチを含め議論するUser Experience Design and Cognitive Engineering（UXC）を新たなTSとして設ける。

iii) IDW '17 に向けて

- ・ 遅くとも2016年のアドプロが発行される前(7月)までに IDW '17 会場を決定する。
- ・ 会場選定の議論は国際会議委員会の場で行う。
- ・ 仙台/浜松が有力候補だが下見結果と費用再見積もり結果で判断予定。

3) 会員関連

i) 賛助会員

2015 年度における賛助会員数の推移は次の通り。

- ・ 2014 年度の賛助会員数：8 社
- ・ 2015 年度の賛助会員数：7 社

ii) 社員

2015 年度における社員数の推移は次の通り。

- ・ 2015 年 4 月での社員数：62 名
- ・ 2015 年度の増減：入社：0 名、退社：2 名
- ・ 2016 年 4 月 26 日現在の社員数：60 名

以上